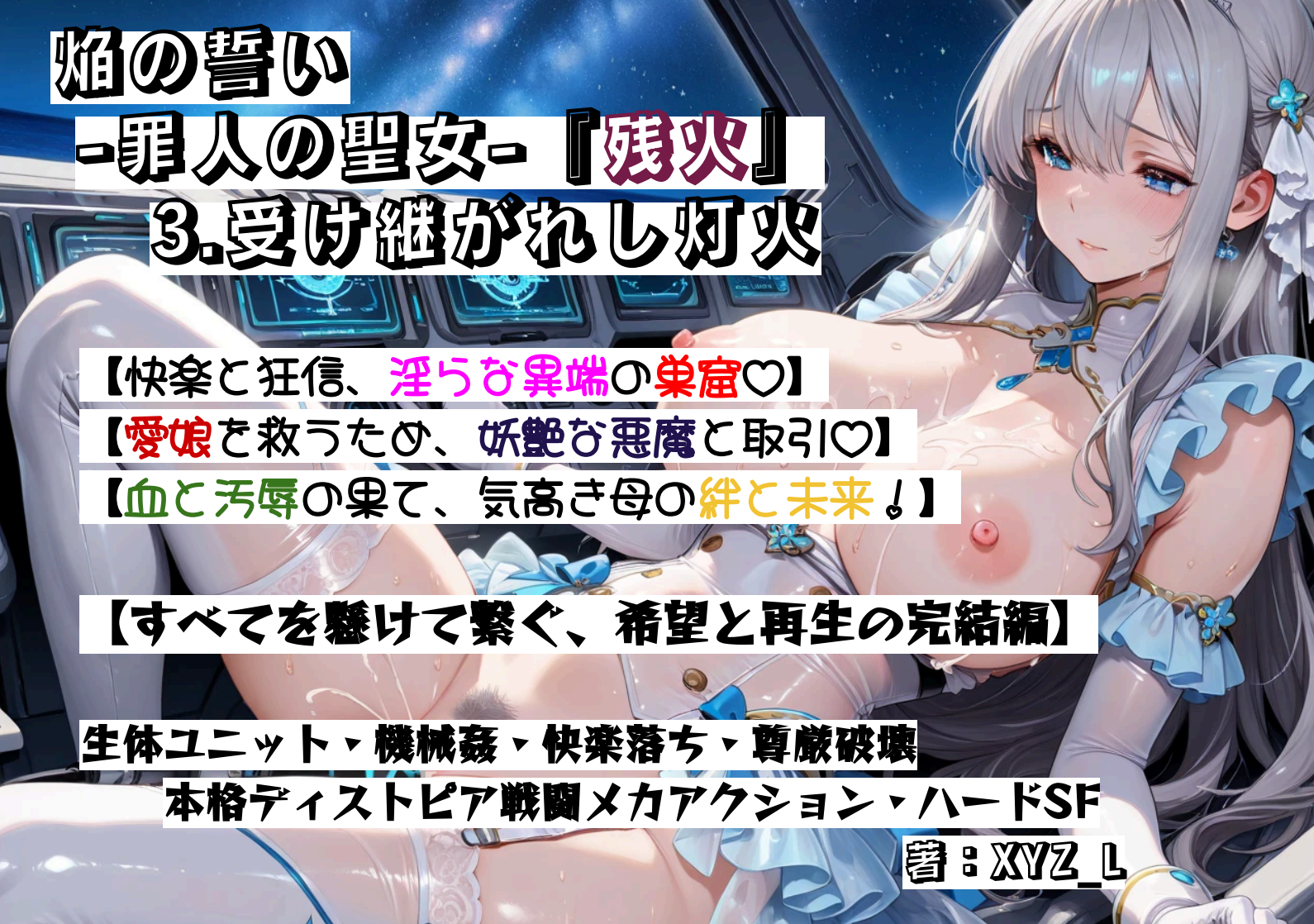




焰の誓い

-罪人の聖女- 『残火』

3.受け継がれし灯火

【快樂と狂信、淫らな異端の楽窟♡】

【愛娘を救うため、妖艶な悪魔と取引♡】

【血と汚辱の果て、気高き母の絆と未来！】

【すべてを懸けて繋ぐ、希望と再生の完結編】

生体ユニット・機械姦・快樂落ち・尊嚴破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

焰の誓い

-罪人の聖女- 『残火』

3.受け継がれし灯火



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ

「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

【前録:特務恩赦・巡礼記録】

聖暦2028年。

北大西洋サルガッソー海域に現出した未曾有の災厄『白銀の奈落』。

その凄惨な討伐戦において、特務指定罪人セリナ・ステリオンは多大なる戦果を挙げた。

世界の脅威たる異端の魔女を、そして連合の悪魔的な兵器へと成り果てていた実の姉を、自らの手で撃ち滅ぼしたのである。

その大いなる功績により、教団は彼女が過去に犯したすべての罪を赦免した。

忌まわしき拘束衣は解かれ、階級を持たぬ者が着る純白の巡礼着が与えられた。

だがそれは慈悲を装った冷徹な厄介払いに他ならない。

教団が下したのは、英雄としての社会的死と、地の果てへの無期限巡礼という名の追放宣告。

供を許されたのは、限界まで摩耗し整備もままならない白銀の棺桶『セラフィム・アウラ』ただ一機のみ。

弾薬が尽きるのが先か、機体が朽ちるのが先か。

自由と引き換えに彼女の手に残されたのは、愛する者たちを殺めたという重く冷たい感触だけだ。

すべてを失い、帰る場所すら奪われた少女は、もはや聖女でも罪人でさえない。

死に遅れた空っぽの亡霊として。

彼女たちが命を燃やして遺してくれた祈りだけを胸に抱き、一人、凍てつく荒野へと足を踏み出す――。

第11章:錆びゆく翼と小さな光

1.白き追放

2028年春。

聖堂都市セラフィア 大聖堂。

聖堂都市の中心にそびえる大聖堂は、狂騒にも似た熱気に包まれていた。

ステンドグラスから降り注ぐ極彩色の光の中、祭壇の高みに立つ大聖女エレノアがよく通る声で高らかに宣言する。

「見よ、迷える子羊たちよ！ 聖女セリナは自らの手で世界を脅かす忌まわしき穢れを討ち、この地に浄化をもたらした！ その大いなる功績により彼女の過去の罪は全て赦されたのだ！」

堂内に集められた数百の高位聖職者や神聖戦士たちが、割れんばかりの歓声と祈りの言葉を叫ぶ。

彼らの目に映っているのは、身を挺して世界を救った無垢なる英雄の姿だ。

だが賞賛の嵐の渦中に立つセリナの心は、絶対零度のように冷え切っていた。

屈辱の象徴であった『セラフィックハーネス』は外され、代わりに与えられたのは階級を持たない者が着る質素な純白の巡礼着だ。

いくら白く清らかな布を纏おうとも、染み付いた血と硝煙の匂いが鼻腔から離れない。

さらにローブの下の柔らかな秘部には、決して外されることのない銀色のピアスが今も冷たい罪の証として肉体に食い込んでいる。

歩みを進めるたびに柔肉を牽引する鋭い痛みが走り、その冷たい金属の感触が罪の重さを子宮の底にまで反響させていた。

自らは手を汚さぬ者たちの無邪気な歓声は耳障りなノイズとなって、彼女の思考を鈍らせる。

何より偽りの祈りを捧げるように胸の前で組まされた両手には、光となって天へ昇っていった姉の最期の温もりが生々しく残っていた。

最愛の姉をおぞましい兵器に変えてしまった自らの裏切り。

その深い罪悪感が呪いのようにこびりついている。

（ごめんなさい.....私がお姉ちゃんを.....）

声にならない謝罪が、冷たい胸の奥底に反響し続ける。

称賛の言葉など空虚な響きでしかない。

世界がどれほど彼女を聖女と讃えようと、セリナの魂はすでにあの大西洋の冷たい海に置き去りにされている。

熱狂が最高潮に達した時、エレノアは慈愛に満ちた微笑みを浮かべてセリナへと向き直った。

「聖女セリナよ。神の赦しを得た貴女に新たな使命を与えよう」

それは慈悲を装った冷徹な宣告の始まりだった。

「貴女にはこの地の果てまで信仰の光を届ける、栄えある無期限の巡礼の旅を命じる」

歓声が一段と大きくなる。

彼らはそれを名誉ある神聖な使命だと信じて疑わない。

だが教団上層部の真意は異なっていた。

教団の深い暗部と凄惨な真実を知りすぎた『汚れ役』は、もはや不都合で危険な存在だったのだ。

これは慈悲を装った厄介払い。

英雄としての社会的死の宣告であり、事実上の追放である。

巡礼に際してセリナに与えられたのは、乗機『セラフィム・アウラ』ただ1機のみだった。

それは罪人の証であった黒い拘束装甲や服従の枷が完全に取り外され、かつての流麗で完璧な白銀の姿へと修復されている。

だが最先端の技術で組み上げられた超精密兵器にとって、補給物資の保証もない旅は致命的だ。

過酷な荒野の環境下では、微細な砂塵や絶え間ない駆動負荷が機体を確実に蝕んでいく。

それはこの美しき白銀の棺桶と共に、誰にも知られず緩やかに野垂れ死ねという教団からの無言の死刑宣告に他ならなかった。

「.....拝命、いたします」

セリナの乾いた瞳に絶望の色すら浮かばない。

抗う気力すら今の彼女には残されていなかった。

空っぽの心を抱え、ただ命じられるままに祭壇を降りる。

光なき瞳で歩みを進める彼女の背中を、無責任な拍手喝采がいつまでも見送っていた。

2. 荒野の墓標

旧欧州 汚染ハイウェイ跡

聖都の重い門が背後で閉ざされてから、まだ数週間しか経っていない。

だが過酷な荒野の孤独は、セリナから日付を数える気力すら奪っていた。

ひび割れたアスファルトと赤茶けた荒野が地平線の彼方まで続く、旧欧州のハイウェイ。

日中は汚染されていない水源を求めて彷徨い、夜は人目を避けて機体の陰で浅い眠りにつく。

教団から与えられた固形食は底を突き、今は廃墟で見つけた古びた野戦糧食で辛うじて命を繋いでいた。

空っぽの心で、彼女はただ「死にきれない」という理由だけで、生存のための行動を繰り返している。

彼女の唯一の同伴者である『セラフィム・アウラ』もまた、限界を迎えていた。

専用のハンガーも補給もない砂塵舞う荒野での行軍は、超精密兵器にとって緩やかな死を意味している。

外観こそ純白を保っているものの、関節部からは微かに黒いオイルが滲んでいた。

歩みを進めるたびに、内部フレームから負荷を訴えるような鈍い軋み音が漏れる。

コックピットの中で、セリナは焦点の定まらない瞳で明滅するコンソールを見つめていた。

精神と機体は、共に緩やかに、だが確実に摩耗し続けている。

そんな虚無を破るように、パッシブセンサーが3つの熱源を捉えた。

距離2500。

猛烈な土煙を上げて接近してくるのは、武装集団『灰犬』の改造パルスマシン群だ。

装甲を剥き出しにし、大出力ジェネレーターを積載した歪な多脚のシルエット。

彼らにとって足を引きずるアウラは、極上の獲物に見えたに違いない。

灰犬の1機が、威嚇するように無誘導ロケット弾を放った。

「.....邪魔」

セリナの心に恐怖も怒りも湧かない。

乾いた唇から漏れた眩きと共に、彼女は駆動力を脚部へと強制バイパスし、スラスターを踏み込んだ。

白銀の機体は滑るように軌道を逸らし、一瞬で敵の懷へと潜り込む。

左腕の発振器からプラズマブレードを展開。

すれ違いざまの、一切の無駄を省いた一閃。

粗悪なコックピットが、内部のパイロットと動力源（オルガ・コア）の女性ごと両断された。

だが着地した瞬間、アウラの脚部から嫌な金属音が鳴る。

モニターに黄色の警告が走った。



(.....くっ、関節部温度、急上昇.....!)

限界を迎えつつあるアクチュエーターにとって、今の踏み込みは想定以上の負荷だった。

目の前で仲間を沈められた残る2機が、怯えたように距離を取る。

セリナは冷徹な戦術的最適解を導き出した。

ガトリング砲の反動は、今のフレームには致命傷になる。

彼女は思考を『サイコ・ミュー』へと直結させ、逃げ惑う敵機をロックオンした。

だがそれは肉体への過酷な代償を伴う。

長期間の飢餓により、ネオタイプ特有の豊かな愛液すらも今は枯渇しきっている。

本来なら『聖水ジェル』による冷却と潤滑を前提としている無機質な極太のデバイスが、乾燥しきった粘膜を無慈悲にこじ開け、肉の壁をヤスリのように擦り上げる。

さらに、秘肉の最奥に食い込んだままの『銀のピアス』がデバイスの硬質な金属と無残に擦れ合い、デリケートな神経を物理的に引き千切ろうとする。

機体を動かすエネルギーを、彼女の未成熟な肉体から強制的に搾り取ろうとする冷酷なシステム。

「あ、ぐっ……んうっ……！」

内臓を押し広げられるような異物感と、神経を直接削り取られるような激痛に、苦悶の喘ぎが漏れた。

それでも彼女は、その子宮を焼くような摩擦熱と痛覚すらもオルガエネルギーへと強引に変換し、操縦桿を引き込んだ。

潤滑油が乾ききったウェポンベイが、不快な音を立てて展開する。

装填されているのは、わずかな純正マイクロミサイル。

ロックオンの警告音と共に、セリナはトリガーを引き絞った。

バインダーのフレームをバックブラストが焼き、どす黒い煙が立ち昇る。

放たれた二条の白煙が、荒野へと飛び出した。

『ちっ、ミサイルか！ だが、こんな距離で当たるかよ！』

広域通信越しに、灰犬のパイロットの嘲笑が響く。

だがその嘲笑は数秒後、絶望の悲鳴へと変わった。

『なっ……軌道を変えやがった！？ 軍用の、誘導弾かよ……ッ！』

軍用の誘導弾は回避運動をあざ笑うかのような高G旋回で、敵機へと正確に食らいついた。

着弾と閃光。

次々と火だるまに変わるパルスマシン。

その瞬間、ズクリと、戦果データがサイコ・ミューを通じてセリナの脳髓と子宮に直接フィードバックされた。

「あ、がっ……ああっ……！」

干からびた肉体に強烈な快樂パルスが暴力的に叩き込まれ、セリナはシートの中で背を反らせた。

だが豊かな蜜が溢れ出すことはない。

ひび割れた粘膜が空しく痙攣し、強制的な絶頂の波に神経だけが焼かれていく。

ひどく虚無的で痛々しい『乾いた絶頂』の余韻だけが、コックピットに反響した。

やがて土煙が晴れ、静寂が戻る。

しかし網膜モニターは無慈悲な真紅の警告UIで埋め尽くされた。

[WARNING : MISSILE AMMUNITION LOW]

[CRITICAL ERROR : ACTUATOR OVERHEAT]

アウラはガクンと体勢を崩し、その場に重く片膝をついた。

戦闘機動は完全にロックされ、残されたのは足を引きずって歩くための最低限の駆動力だけだ。

荒い息が収まるのを待つこともなく、非常用電源の薄暗い緑光の中で、セリナは震える手で野戦糧食を口に運んだ。

飢えを満たすためではない。

ただ「死ねない」から、胃袋に物を詰め込むだけの虚しい作業。

口内に広がる血の味と、空調から漏れ出す焦げた泥の匂い。

頬を伝う冷たい涙が、薄汚れた純白の巡礼着を黒く染めていく。

(.....お姉ちゃん、私、いつまで生きればいいのか.....)

誰にも届くことのない問いかけが、荒野の風音に虚しくかき消されていった。

3.交差する孤独

世界を分厚い灰色の雲が覆い尽くし、冷え切った大地に氷雨が降り注いでいた。

視界を白く霞ませる無数の雨粒が赤茶けた荒野の泥を叩き、失われた旧世界の残骸である巨大な廃工場のシルエットをぼんやりと浮かび上がらせている。

錆びついたトタン屋根を打つ単調な雨の音が、葬送曲のように廃れた建屋の中に響き渡る。

灰犬との死闘から、どれほどこの冷たい雨の中を歩いただろうか。

セリナは戦闘機動がロックされた『セラフィム・アウラ』を操り、深手を負った獣のような足取りで半壊したシャッターをくぐった。

コンクリートの床にできた無数の水たまりが、白銀の重い足音に合わせて細かな波紋を揺らしている。

だが、ついに限界が訪れた。

網膜モニターで明滅していた赤色の警告灯が、致命的なシステムフリーズへと変わる。

アウラは重苦しい金属音と共に、その場に力なく片膝をついた。

泥水が大きく跳ね、静寂の中に反響する。

メインカメラがブラックアウトし、コックピット内は非常用の薄暗い緑光だけになった。

機体下部からは「キン……キン……」という甲高い異音が響く。

関節部のアクチュエーターが完全に潤滑不全を起こし、焼き付く寸前の悲鳴を上げていた。

補給も整備も絶たれた荒野において、機体の死はパイロットの死と同義だ。

熱を失っていく装甲が、パキ、パキと軋むような冷却音を微かに立てている。

それは確実な死の足音だった。

アウラのオルガエンジンが停止したことで、荒野の致死的な冷気が
コックピットのセリナを容赦なく包み込む。

幾度も彼女の柔肉を内側から無慈悲に削り、極限の快楽と苦痛で汚
し、共に血の海を渡ってきた罪の象徴。

と同時に、この地獄のような荒野で彼女の命を繋ぎ止めていた唯一
の同伴者が、完全に沈黙したのだ。

(これで、ようやく終われるのね.....)

セリナは冷え切った操縦席で白く濁った息を吐き出すと、手動ハッ
チを開放した。

冷たい雨の匂いが、空調から漏れ出していた焦げたオイルの異臭を
和らげる。

恐怖も悲しみも湧かない。

あるのは肌を刺す物理的な死の冷たさと、錆びついた屋根を打つ単
調な雨の音だけ。

自分を縛り付けていた呪わしいシステムさえも死に絶え、世界にたった一人取り残されたという圧倒的な虚無。

この誰にも知られない廃工場で、動かなくなった機体と共に静かに朽ちていくことが大罪人である自分に相応しい最期なのだと、彼女は空っぽの心で絶対的な終焉を受け入れていた。

セリナは操縦席から力なく立ち上がり、開け放たれたハッチから外へと身を乗り出す。

泥と油にまみれた純白の巡礼着を翻し、地上へ降りるために機体から展開されたタラップへと足をかけた。

沈黙した装甲にすがりつくようにして梯子を降りる。

すでに死を受容し、終わりの静寂に身を委ねた彼女の思考から、戦士としての警戒心は完全に抜け落ちていた。

彼女が不安定な体勢のまま、冷たいコンクリートの床へ向かって降りようとした、その時だった。

「——その音……関節部の駆動系だ」

薄暗い工場の片隅から、完全に死角となっていた背後を真っ直ぐに突く、男の掠れた声が響いた。

接近の気配にすら一切気づけなかった。

セリナの心臓が警鐘のように激しく跳ね上がり、全身の血の気が一瞬で引く。

息を呑み、タラップに足をかけた不安定な体勢のまま、弾かれたように振り返って瞬時に拳銃を抜き放った。

声の主へと銃口を向けるが、不意を突かれた極限の緊張と疲労により、グリップを握る指先は痙攣するように震えていた。

暗がりから姿を現したのは、使い古されたタクティカルコートを纏った一人の男だった。

男は銃口を向けられても足を止めない。

その視線はセリナではなく、傷だらけの純白の装甲へと注がれていた。

そこにはただの野盗や難民にはあり得ない、機体そのものを労わるような深い悲哀が滲んでいた。

「放置すれば焼き付くぞ。そうなれば、二度と動かない」

「止まれ。それ以上近づけば……」

威嚇しようとしたセリナの声は、途中で掠れて消えた。

男の胸元。

大切に抱えられた小さな毛布の包みから、苦しげな熱い吐息が漏れ聞こえたからだ。

あどけない幼子の顔。

しかしその小さな命の火は、異常な高熱によって今にも消え入りそうに揺らいでいる。

男は、自らに向けられた銃口から決して目を逸らさない。

己の命を天秤にかけてでも、腕の中の命だけは守り抜く。

父親としての剥き出しの執念が、その双眸に宿っていた。

「俺が直す。この機体なら、俺が直せる」

一歩、男が踏み出す。

「.....そのベースとなった『オリジナル』を、ずっと整備していたのは俺だ。だから.....」

（——助けてくれ。薬を、水を、この子に）

言葉には出さずとも、父親の血を吐くような悲痛な懇願が、ネオタイプであるセリナの胸を物理的な衝撃となって貫いた。

同時に、限界まで酷使され剥き出しとなったセリナの神経網が、チリッと焼ける。

男の腕の中の小さな熱から漏れ出す、特異な生体パルスを受信したのだ。

その瞬間。

脳髄の奥底に封じられていた『白銀の奈落』の残存データが、目の前の波長と強制同期を起こす。

バチリ、と頭蓋の奥で火花が散った。

鋭い痛覚と共に視界が暴力的に上書きされ、かつてのビジョンが鮮烈に展開される。

——見知らぬ無骨な男の背中と、銀色の髪をした小さな赤ん坊。

北大西洋での決戦。

イラストリアスが命を燃やし、光となって消える直前に神経へ直接焼き付けられたデータ。

オリジナル。

あの冷たい海で、自分と姉の魂を救うために命を燃やし、光となって消えていった偉大なる白銀の戦乙女の愛機、白銀の『セラフィム・ヴァルキリー』。

すべてが、繋がった。

目の前に立つのは、自分が敬愛したあの人が最期まで信頼した専属整備士。

そしてその胸に抱かれているのは、あの人がこの残酷な世界に遺した唯一の忘れ形見なのだ。

「あ……」

乾いた唇から漏れたのは、言葉にならない嗚咽だった。

セリナの指から力なく銃が滑り落ち、コンクリートの床に冷たい音を響かせる。

自分が生き残ってしまった罪悪感に押し潰されていた彼女の前に、己の命を燃やしてでも守るべき「明日」が提示された。

整備不能な機体に追い詰められた、罪人の聖女。

幼い命の危機に瀕し、荒野を彷徨う父親。

深い絶望の底で。

最初の光が遺した残火のような光が、二つの孤独な魂を静かに交差させていた。

4.束の間の家族

廃工場の冷たいコンクリートの床に、くぐもった金属音とオレンジ色の火花が散る。

男は手持ちの貧弱な工具と廃材だけを頼りに、沈黙していた『セラフィム・アウラ』の脚部装甲を開けていた。

焼き付いた関節部アクチュエーター。

その修復作業に取り掛かる。

「オリジナルのフレーム構造を知っていれば、損傷したメイン回路を切り離し、予備系統へバイパスを組むことができる」

油まみれの手で焦げた配線を繋ぎ直しながら、カイと名乗った男は淡々と状況を告げる。

その無駄のない手際の良さは、彼がかつてあの偉大なる戦乙女（あのかた）の専属整備士であった事実を、残酷なまでに証明していた。

「.....あの狂った教団を、俺は捨てた」

静かな告白。

「イラストリアスが命を懸けて護ったこの子を、あいつらの部品に
など絶対にさせない」

それは、彼らが単なる偶然の出会いではなく、同じ地獄を知り、同
じ光を愛した同志であることの確かな証明だった。

一方、セリナは少し離れた木箱の上に座り、硬直した姿勢で毛布に
くるまれた小さな命を抱いていた。

腕の中で身じろぎする幼子、フランドル。

毛布の隙間から覗くのは、月光のように透き通る白銀の髪と、深く
澄んだ青い瞳。

その顔立ちは、セリナが誰よりも敬愛したあの方の面影を、胸が痛
くなるほど色濃く残していた。

人を殺めることしか知らなかったセリナの指先は、怯えるように微かに震える。

血と硝煙の匂いが染み付いたこの手で、無垢な命に触れていいはずがない。

姉を手に掛けた罪悪感が、彼女の胸を締め付ける。

だが、フランドルはそんな葛藤など気にも留めない。

アウラの非常用キットから投与した解熱剤が効き始めたのか。

小さな命を削っていた異常な高熱は引き、荒かった呼吸もようやく落ち着きを取り戻しつつある。

セリナが自身の水筒のキャップに溶かした粉ミルクを、小さな両手で掴み、たどたどしい口つきで一生懸命に飲んでいる。

過酷な逃亡生活による栄養失調で、本来の年齢よりもずっと小さく、未成熟な身体。

それでも。

トクン、トクンと。

毛布越しに伝わってくる鼓動は、規則的で力強かった。

冷え切っていたセリナの膝の上に、確かな命の熱が広がっていく。

ミルクを飲み終えたフランドルが、満足そうに目を細め、「あーう」と舌足らずな笑声を上げた。

そして、泥で薄汚れたセリナの指を、小さな両手でぎゅっと握りしめる。

絶対的な安心を寄せるように。

驚くほど温かく、そして柔らかい感触だった。

これまでセリナが握ってきたのは、冷酷な操縦桿か、銃のグリップだけだ。

過酷なシステムに神経を焼き切られ、血と油に塗れた自らの汚れた肉体に、こんなにも純粋な命の熱が直接触れている。

砂漠のように乾ききっていた彼女の心に、その熱が、1滴の真水のように染み渡っていく。

「.....だめよ。私は.....罪人だから」

ぽつりと、掠れた声が漏れた。

「誰も守れなかった.....。お姉ちゃんも、イラストリアス様。私みたいな汚れた人間が.....こんな、温かい命に触れる資格なんて.....ないのに.....ッ」

セリナは必死に涙を堪えようと身を強張らせた。

だが、フランドルの小さな指が、その罪すらも許すかのように、もう1度彼女の指を強く握りしめ直した。

堰を切ったように、涙がぼろぼろと溢れ出した。

作業の手を止めたカイが、静かにこちらを見つめている。

その瞳には、教団に使い潰された少女への同情と、愛した女性を救えなかった己の後悔を乗り越えようとする、父親としての確かな覚悟が滲んでいるように見えた。

「.....君は、生きていていいんだ」

カイの口から紡がれたのは、不器用で、しかし互いの傷を温め合うような熱を帯びた言葉だった。

英雄という名の死刑宣告を受けたセリナを、初めて1人の人間として肯定する声。

その一言が、セリナの心に掛けられていた分厚い氷の鎖を粉々に打ち砕いた。

雨音の響く廃工場の中に、少女の抑えきれない嗚咽が満ちていく。

それはもう、孤独の涙ではない。

凍りついていた時間が溶け出し、殺戮の道具として消費されかけた魂が、ささやかな再生の産声を上げた瞬間だった。

5.夜明けの誓い

翌朝。

数日ぶりに厚い雲が割れ、廃工場の錆びついたシャッターの隙間から、眩い朝日が差し込んでいた。

冷たい雨はすでに上がり、無数にできた水たまりが黄金色の光を反射してきらきらと輝いている。

工場の出口には、再起動を果たした『セラフィム・アウラ』が静かに佇んでいた。

カイの施したバイパス回路により、その脚部は再び大地を踏み締めるだけの確かな力を取り戻している。

装甲に付着していたオイルと泥も、彼の手によって丁寧に拭き取られていた。

セリナは、朝の冷たい空気を胸いっぱい吸い込んだ。

鼻腔をくすぐるのは、雨上がりの土の匂い。

そして、隣に立つカイの腕で眠るフランドルの、甘いミルクの香りだ。

やがてフランドルが目を覚まし、小さな手をセリナの方へと伸ばす。

セリナはその手を、自分の指で優しく握り返した。

伝わってくる確かな命の熱。

それが、あの凄惨な海で姉が遺した『生きて』という言葉の真意を、セリナの魂に深く刻み込んでいく。

（お姉ちゃん……私、わかったよ）

姉は、この温もりを。

未来へ繋ぐ光を。

絶望の世界から守り抜いてほしかったのだ。

セリナの瞳には、自らが背負うべき本当の使命を見出した者の、静かで力強い決意が宿っていた。

教団に作られた偽りの英雄ではない。

一人の人間として、この小さな命を守る強固な盾となる。

それこそが、命を懸けて自分を救ってくれた姉と先人たちへの、本当の贖罪だった。

「……出発の準備は整ったか」

荷物をまとめ終えたカイが、静かに問いかける。

その横顔には、喪失の痛みを抱えながらも前を向こうとする、父親の強さが滲んでいた。

セリナは力強く頷き、アウラのコックピットへと続くタラップに足をかける。

昨日まで己を戒める罪の象徴であり死の棺桶であった白銀の装甲が、今はこの小さな命の未来を切り開くための頼もしい盾として、彼女の掌に確かな冷たさを伝えてきた。

「ええ。まずはこの子のための薬と.....雨風を凌げる、安全な場所を探しましょう」

そして振り返り、彼女は彼らへ向けて、少しだけぎこちない、けれど心からの笑顔に向けた。

偽りの凱旋式でも、死線の果てでも見せることのなかった、年相応の少女としての柔らかな表情。

「行きましょう、カイさん。.....私、この子の『お姉ちゃん』になりますから」

真っ直ぐに紡がれたその決意に、カイはわずかに目を丸くし、やがて優しく吹き出すように笑った。

血の繋がりはない。

背負っている罪も傷も違う。

けれどそれは間違いなく、いびつで何よりも温かい、新たな家族が誕生した瞬間だった。

三人が進み始めた荒野の先を、昇りゆく太陽の光がどこまでも真っ直ぐに照らし出している。

彼らの過酷な旅はまだ終わらない。

だが、その足取りはもう、死を待つだけの空虚なものではなかった。

第12章:無垢なる異能と茨の巡礼

1.荒野の箱庭

長く厳しかった荒野の冬が終わりを告げようとしていた。

聖暦2029年、春。

旧欧州の荒野の地下深くに作られた、堅牢な旧軍事シェルターの跡地。

厚いコンクリートの壁に囲まれた薄暗い空間には、浄水装置と環境維持ジェネレーターの重低音がまるで巨大な心臓の鼓動のように静かに響き渡っている。

換気扇が回るたびに埃っぽい乾いた空気と、微かに焦げたガンオイルの匂いが鼻腔をくすぐった。

セリナ・ステリオンは、分厚い防塵シートを被せられた『セラフィム・アウラ』の足元に立っていた。

彼女は純白の巡礼着の袖からほっそりとした腕を伸ばし、傷だらけになった白銀の装甲に残るかつての『黒い拘束具』のボルト痕をそっと指先でなぞる。

それは彼女が「罪人の聖女」として戦い抜いた、生々しい傷跡だった。

ひんやりとした金属の感触が、一年前の記憶をフラッシュバックさせる。

連合の収容所で無機質な機械を神経の髄まで強制接続され、人としての尊厳を無慈悲に蹂躪された氷のように冷たい記憶。

教団の罪人として脳髓を焼き切るほどの高圧電流を流され、許容量を超える感覚の強制的な暴走によって精神をドロドロに溶かされた地獄の熱。

極太のデバイスに内臓を無慈悲に押し広げられ、強制的な絶頂の波に自我を削り取られ続けた生々しい肉体の痛みと快楽の残滓。

ふと、アウラの白銀の装甲に自らの姿が仄暗く映り込んだ。

一年という過酷な時を経たというのに、鏡に映るその肉体には何の変化も起きていない。

瑞々しい肌の張りも、愛らしい桃色の髪も。

あの日「生体部品」として最も都合よく使い潰されていた、命を持たない精巧な造形物のような質感のまま、不気味なほど完璧に時を止められている。

人間らしい健全な加齢や新陳代謝すらシステムに奪われ、呪いのように美しいまま固定化された後遺症。

内側の神経や精神は限界まで擦り切れているのに、外側の器だけが老いることすら許されないという非情な現実。

自らの歪な肉体にセリナが微かな息苦しさを覚えた、その時だった。

「.....あう、だめえ」

背後から響いた幼く愛らしい声に、セリナは弾かれたように振り返る。

少し離れた作業台の傍ら。

おぼつかない足取りも随分としっかりしてきたフランドルが、小さな両手で水差しを抱え、ひっくり返しそうになって慌てていた。

光を弾くような無垢な銀髪が、ジェネレーターの微風に揺れている。

セリナの心にへばりついていた冷たいフラッシュバックは、その光景を見た瞬間に霧散した。

「気をつけて、フラン。手伝うわ」

セリナは小走りで駆け寄り、フランドルの小さな手をそっと包み込むようにして水差しを支えた。

フランドルが嬉しそうに微笑み、足元にある宝物を指差す。

それは、空になった30ミリの大口徑弾薬ケースだ。

数週間前、セリナが危険な地上探索の帰りに、瓦礫の隙間で奇跡的に汚染を免れていた名もなき植物の種を拾ってきた。

それを見たカイが弾薬ケースの底に水抜き穴を開け、泥から濾過した黒い土を詰めて即席の鉢植えを作ってくれたのだ。

フランドルはその鉢植えを、アウラのコックピットブロックのすぐ傍に置いている。

現在、アウラのオルガエンジンは物理的に切断され、完全に沈黙していた。

セリナという熱源（生体コア）を失った機体は、本来ならば凍てつくような冷たい鉄の塊でしかない。

だが優秀な整備士であるカイは、シェルターの生命維持用ジェネレーターからの排熱を配管越しにアウラの装甲へと誘導し、外部からの熱伝導によって機体凍結を防ぐ保温スリープモードを強引に構築していた。

かつてセリナの未熟な肉体を極太のデバイスで貫き、内側から激痛と快楽で焼き切った禍々しい巨大な兵器は、今や外からの熱を与えられ、小さな命の種を温めるための安全で穏やかなゆりかごとして機能していた。

「おおきくなあれ」

フランドルがセリナに支えられながら、真っ黒な土へ雫を滴らせる。

土が水を吸い込み、微かに青臭い生命の匂いがした。

焦げたガンオイルと埃っぽい空気の中で、そのささやかな黒い土だけが瑞々しい本物の命の息吹を放っている。

時を止められた呪いの肉体を持つ自分と、健やかに時間を刻んで成長していく無垢な娘。

その生と死のコントラストを前に、セリナの胸の奥でわずかな葛藤が疼く。

かつて仲間を裏切り、血と汚濁にまみれた大罪人の自分が、こんなにも穏やかで満ち足りた時間を過ごしていいのだろうか。

「.....セリナ」

不意に、低く落ち着いた声がした。

振り返ると、作業台でレンチを握っていたカイが、オイルで汚れた手を布で拭きながらこちらを見ていた。

彼は無言で歩み寄ると、傍らのテーブルに置かれていたマグカップをセリナに差し出した。

中には代用木の実を焙煎した、温かいコーヒーが注がれている。

「少し休め。顔が強張ってるぞ」

ぶっきらぼうな言い回しだが、その声には確かな気遣いが滲んでいた。

「ありがとう、カイ……」

セリナがマグカップを受け取ると、指先から温かな熱が伝わってくる。

かつて生きる意味を失っていた自分にかけてくれた不器用な言葉が、胸の奥の葛藤を優しく溶かしていく。

ポタッ、ポタポタッ——。

不意に重い隔壁の隙間から、規則的な水滴の落ちる音が聞こえた。

セリナはマグカップを置き、入口のコンソールのロックを解除して外のモニターカメラを起動する。

ざらついたモノクロの映像が、シェルターの外の景色を映し出した。

荒野を覆い尽くしていた分厚い氷雪が溶け始めている。

氷がひび割れ、赤茶けた大地が泥濘となって顔を出していた。

冷たい風の代わりに、微かに湿り気を帯びた空気が隔壁の隙間から流れ込んでくる。

血と油に塗れたこの残酷な世界にも、確かに季節は巡ってきているのだ。

「ママ、みて！きて！」

シェルターの奥から、フランドルの弾んだ歓声が響いた。

ただならぬ喜びに満ちた声色にセリナとカイは顔を見合わせ、同時にアウラの足元へと駆け寄る。

代用コーヒーと冷却液の匂いが混ざり合う空間で、小さな奇跡が起きていた。

真っ黒な土を力強く押し上げるようにして。

鮮やかな緑の双葉が、ちょこんと顔を出していたのだ。

無機質な鉄の塊に囲まれたこの箱庭で、その有機的な生命の色彩は息を呑むほどに美しかった。

「お花、さく？」

フランドルが嬉しそうに双葉を指差し、セリナの純白の巡礼着の裾を引く。

「ええ……。きっと、綺麗な花が咲くわ」

セリナはその場にしゃがみ込み、フランドルの小さな身体を強く抱きしめた。

柔らかな銀髪感触。

ふわりと香る甘いミルクの匂い。

圧倒的なまでに純粋な生命の熱。

その温もりに触れた瞬間、セリナの桃色の瞳から自然と涙が零れ落ちた。

それはかつて神経を焼く激痛と、無機質な機械による残酷な搾取によって流させられた屈辱の涙ではない。

完全に凍りついていた心が解け、過去の罪を乗り越えて本当の母親として新生した証の温かい涙だった。

ふとセリナの華奢な肩に、大きく頼もしい手が置かれた。

見上げるとカイが優しい眼差しで、彼女と長旅の末に芽吹いた緑の双葉を見下ろしている。

彼の無骨な手のひらからは、静かな覚悟と家族を守り抜くという強い意志が伝わってくる。

「.....お前が守った命だ。春だな、セリナ」

いつかまた、外の脅威がこの箱庭を壊しに来るかもしれない。

明日をも知れぬ過酷な世界だ。

それでも、この小さな緑の芽吹きと背中を合わせて生きる家族の温もりこそが、彼女にとっての本物の春だった。

セリナは涙を拭い、静かに眠るアウラの純白の装甲を見上げる。

この可憐な花と、腕の中にいる娘の未来を、自らの命に代えても守り抜く。

荒野に訪れた雪解けの音を聞きながら、一人の気高き戦士は静かにそう誓った。

2.白き開花

聖暦2029年、秋。

あの絶望の廃工場での運命の邂逅から、1年半の月日が流れていた。

地上では相変わらず教団や連合の争い、そして異形の怪物たちが跋扈する地獄が続いている。

だが、分厚い隔壁に守られたこの地下シェルターだけは、世界の残酷さから切り離されたように静謐な時間が流れていた。

カイが廃墟から回収したシステムを修復し、セリナが単身で外へ赴き危険な物資確保を担う。

互いの命と技術を預け合うことで、彼らはこの小さな箱庭を維持し続けていた。

「ママ、みて。お花、さいたよ」

たどたどしい言葉と共に、フランドルが小さな手に何かを握りしめて駆け寄ってくる。

セリナは古びたシンクで洗い物をしていた手を止め、振り返った。

柔らかな微笑みを浮かべると、そのままフランドルの目線の高さに合わせて冷たいコンクリートの床にしゃがみ込む。

かつて大聖堂で冷酷な死刑宣告を受けた際の、凍てついた虚無の面影はもうない。

生きる目的を見出した頬は健康的な色を取り戻し、その眼差しは深い慈愛に満ちている。

彼女は教団のシステムに消費されるだけの罪人から、一人の確かな人間へと穏やかな再生を遂げていた。

フランドルが誇らしげに差し出したのは、荒野を生き抜いて咲いた一輪の可憐な白い花だった。

春の雪解けに芽吹いたあの小さな双葉に、フランドルが毎日欠かさず水を捧げ続けた賜物だ。

「本当ね。フランドルが毎日お水をあげてくれたから、こんなに綺麗に咲いたのよ」

泥だらけの小さな頭を撫でると、フランドルは太陽のように笑った。

そしてそのままセリナの足にぎゅっとしがみつки、純白の巡礼着に泥がつくことなどお構いなしに、その温もりに顔を埋めてくる。

その愛らしい重みと、小さな背中から伝わる汗ばんだ柔らかな体温。

それが、セリナの胸にこびりついていた過去の血の匂いを少しずつ、確実に浄化していく。

少し離れた場所では、カイが作業灯の下でジェネレーターの配線作業を行っている。

油に塗れた手で工具を操る彼の横顔もまた、家族を支える頼もしい父親のそれへと変わっていた。

心地よい金属音と低い駆動音が、シェルター内に響く。

彼の無骨な作業台の片隅には、フランドルが昨日摘んできた同じ白い花が、空の薬莢を綺麗に洗った小さな花瓶に大切に一輪だけ挿されていた。

血と鉄の匂いしか知らなかった男の特等席で、その小さな命はひだまりのような甘い香りを放っている。

夜になり、フランドルがカイの太い腕の中で丸くなり、無防備な寝息を立てる頃。

彼女の小さな指先は、油の匂いが染み付いたカイの固く分厚い作業着を、白く無垢な手で絶対に離さないとでも言うように無意識にぎゅっと握りしめていた。

その愛おしい執着に目を細め、カイがそっと毛布を掛け直すのを見届けた後。

セリナは居住区の片隅に設置された簡易な温水シャワーで、一日の汚れを洗い流していた。

薄暗い照明の下、錆びた鏡に映る自らの裸体を見下ろし、小さく息を吐く。

首筋や背中には、教団が彼女を縛り付けた『セラフィックハーネス』の生々しい拘束痕が、赤黒く色素沈着して残っている。

そして何より、彼女の股間——柔らかく濡れた秘部の最奥には、連合の収容所で打ち込まれた『銀のピアス』が、今も冷たい罪の証として柔肉に食い込んでいた。

タオルで身体を拭くたびに、歩むたびに牽引される鋭い痛みと、冷酷な金属の異物感。

どんなに表面の泥や血を温水で洗い流しても、自分の身体は男たちの暴力的な欲望と狂ったシステムに犯し尽くされた、汚らわしい『生体部品』のままだ。

「.....私みたいな汚れた人間が、あんな純粋な子を抱いていいはずがないのに」

ぽつりと漏らした独り言。

だが、少し開いていたシャワーブースの薄いカーテンの向こうから、低い声が響いた。

「.....汚れじゃない」

ハッとして振り返ると、作業台に寄りかかったカイが、真っ直ぐにこちらを見つめていた。

無防備な姿を見られたことに気づき、セリナは慌てて傍らの純白の巡礼着を素肌に羽織って身をすくませたが、カイは視線を逸らすことなく、ただ静かに彼女の傷だらけの身体を見据えた。

これまで彼女の柔肉を舐め回すように貪ってきた男たちの、あの粘着質で下卑た欲情の色は、カイの瞳には微塵も浮かんでいない。

その静かな双眸にあるのは、過酷な戦場を生き抜いた同志へ向ける、真っ直ぐで揺るぎない敬意だけだった。

「その傷も、その戒めも。お前が仲間を守るために泥を啜り、地獄の底を一人で歩き抜いてきた証だ。……お前は汚れてなんかいない。誰よりも気高い、一人の戦士だ」

カイは油の染み付いた無骨な手を伸ばし、巡礼着の襟元を握りしめて震えるセリナの手を、上からそっと、優しく包み込んだ。

それは、教団の冷たい機械でも、連合の暴力的な男たちの手でもない。

一つの命を守り抜くために共に立つ、不器用な父親の、ひだまりのように温かい手だった。

「.....カイ.....っ」

セリナの瞳から、大粒の涙が溢れ落ちた。

己の存在を根底から否定し続けてきた罪の意識と、柔肉の奥に泥のようにへばりついてた汚辱の感覚が、その手の温もりによってゆっくりと溶かされていく。

かつて彼女の柔肉を無慈悲に犯した機械の冷たさや、男たちの暴力的な情欲とは違う。

ただ同じ絶望を知り、同じ光を守ろうとする不器用な熱だけが、傷だらけの二人の魂を深く、確かに結びつけていた。

その温もりに背中を押されるように、セリナは居住区の最奥部へと歩み寄り、セラフィム・アウラの冷たい装甲にそっと手を触れる。

オルガエンジンを物理的に切断され、防塵シートを被せられた純白の機体。

かつての彼女にとって、それは自らの肉体を削り取る殺戮兵器であり、白銀の棺桶だった。

だが今の彼女にとって、あの機体は全く異なる意味を持っている。

シェルターの排熱を蓄え小さな命を温める「ゆりかご」であり、このささやかな箱庭を外敵から守り抜くための最も頼もしい盾なのだ。

(.....お姉ちゃん、イラストリアス様.....)

姉が遺した命のバトン。

あの人が遺した小さな光。

自らのような大罪人が、この幸福の中に留まることへの迷いは、すでに完全な決意へと変わっていた。

この幸せな日常が、一日でも長く続くように。

たとえ自らの命を燃やし尽くすことになろうとも、私はこの小さな命を守り抜く。

そのために、明日もまた危険な外へ出る覚悟はできている。

誰も訪れない世界の果てで、3人で静かに年を重ねていく。

それが今のセリナが描く、最も美しく切実な未来への祈りだった。

3.顕在化する力

その凄惨な崩壊はあまりにも唐突に訪れた。

カイが物資の調達へ向かい、セリナが居住区の清掃を行っていた静かな午後のことだ。

シェルターの入り口付近。

瓦礫の隙間で一人遊んでいたフランドルが小さな影を見つける。

それは片方の翼を痛め、過酷な荒野を飛べなくなった渡り鳥だった。

フランドルは怪我をした鳥を助けようと、純粋な善意からその小さな両手を差し伸べる。

だが彼女の無垢な指先が温かい羽毛に触れた瞬間、運命の歯車が致命的な音を立てて狂い始めた。

パキ、というひどく乾いた音が響く。

幼い彼女が知る由もない、内奥に眠る『エコーズ』の力が、その純粋な善意をトリガーにして無慈悲に発動してしまったのだ。

周囲の空間が陽炎のように激しく歪み、渡り鳥の小さな命が瞬く間に彼女の掌へと吸い上げられていく。

必死に羽ばたこうとした鳥の姿は次の瞬間、黒い炭の塊へと変貌した。

温かかった羽毛の感触は完全に失われ、さらさらと音を立てて無惨な灰の山となり、小さな指の隙間から崩れ落ちる。

「……あ……」

自分の手の中で命が消滅し、灰に変わった光景。

フランドルの瞳が限界まで見開かれる。

理解を超えた恐怖が幼い心を完全に支配し、フランドルの喉から鼓膜を劈（つんざ）く悲鳴が放たれた。

「いやあああああッ！！」

それは空間の位相そのものを震わせる、エコーズ特有の不可視の波動。

かつて世界を絶望に陥れた力の強烈な片鱗だった。

その異常な高エネルギーの波長に、最も早く呼応した存在があった。

シェルターの最奥部に安置されていた『セラフィム・アウラ』である。

メインのオルガエンジンは物理的に切断されており、本来ならば絶対に動くはずのない鉄塊。

だが、フランドルの悲鳴を『莫大な燃料（パルス）』として受信したアウラのサイコ・ミューは、狂ったように強制再起動のシークエンスを開始した。

機体は、カイが凍結防止のためにシェルターのジェネレーターから繋いでいた『保温用のバイパス回路』を強引にハッキングして逆流させ、外部の電力を限界まで吸い上げ始めたのだ。

強烈な衝撃波と共に、分厚い防塵シートが吹き飛んだ。

メインカメラが禍々しい真紅の光を放つ。

ピィィィィン、という甲高いジェネレーターの駆動音が閉鎖空間に響き渡る。

セラフィム・アウラは自身の関節部を激しく軋ませながら、システムのエラー表示を無視して重々しく立ち上がろうと暴れ狂う。

異変に気づいて血相を変えて飛び出してきたセリナと、外から帰還したばかりのカイ。

二人の目に飛び込んできたのは、世界の終わりのような光景だった。

足元に黒い灰を散らして泣き叫ぶ幼い娘。

その悲鳴の波動をエネルギー源として喰らい、外部の電力を吸い上げてパイロット不在のまま狂い蠢く白銀の悪魔。

無垢な善意で命を塵へと変えてしまう呪われた力と、それに呼応して魂を貪ろうとする機械の暴走。

二人の脳裏に、かつてすべてを失った『白銀の奈落』の記憶が鮮明にフラッシュバックする。

セリナの顔から完全に血の気が引いた。

カイもまた持っていた物資を取り落とし、呆然と立ち尽くしている。

この小さな娘の存在は世界を滅ぼす引き金であり、同時に世界中の勢力から血眼になって狙われる最大の特異点なのだと、二人は圧倒的な絶望と共に理解した。

束の間の箱庭は、圧倒的な絶望の波に飲み込まれ、音もなく崩れ落ちた。

作品名: 焰の誓い-罪人の聖女-『残火』3.受け継がれし灯火

発行日: 2026年7月19日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
